

THE NEW STANDARD OF
"NOBLESSE
OBLIGE"

日本UNHCR協会
(国連難民高等弁務官
事務所、
国内委員会) 理事長

赤野間 征盛

さん

YUKIMORI AKANOMA

国連機関の中、人道御三家と呼ばれているものに、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）、WFP（国連世界食糧計画）、ユニセフ（国連児童基金）がある。最前線の国連機関にありながら、なじみの薄いのが難民支援機関UNHCRではないだろうか。歴史的背景、地理的条件などから、私たちは「難民」について身近に考える機会が少ないのかもしれない。しかしそれはもはや先進国として恥ずかしいことでもある。

難民問題の解決 に向け、民間支援 の窓口となる

内戦や戦争に巻き込まれたり、宗教や人種、政治的な立場から生命の安全を脅かされ、故郷をやむなく逃げ出し、国際社会からの保護や支援を必要としている人たちを「難民」と呼ぶ。UNHCR（国連難民高等弁務官事務所、以下UNHCR）は1950年に設立された国連の難民支援機関であり、こうした難民を国際的に保護し、難民問題の解決を目指して活動している。活動基金のほとんどが政府、民間からの寄付によってまかなわれており、各国政府からの援助が横ばいの中で強く必要とされているのが民間からの支援だ。日本でも民間からの支援の窓口として日本UNHCR協会が2000年1月に設立され、その理事長を赤野間征盛さんが務めている。長年出版界に籍を置き、講談社インターナショナル編集長、アジア・プレスの代表などを歴任し、日本文化を世界に発信し続けてきた方である。

恒久的解決の

1つは

「教育」

私たちは、難民と呼ばれる人

たちについて、テレビ報道でしか知らないことがほとんどだろう。難民の多くは、水も食料も不十分な中、何日もかけて命からがら逃げてくるのだという。また、男性は兵士として戦地へ連れていかれたり、殺害されてしまうことも多く、難民の約8割は子供と女性で構成されている。そのため、女性ならではの苦しみに気がつけるようUNHCRの現地スタッフにも女性が多く、現在約80名の日本人スタッフも、女性スタッフが多いという。

保護を求めてきたその日から、すばやくテントを設置し、水、食料、毛布や生活用品など最低限の生活が営めるように支援を始める。が、しかし、UNHCRの役目はこうした一時的な保護だけにとどまらず、中長期的支援、そして、最終的には恒久的解決を目指すことを目的としている。その解決に必要なものの1つが教育だ。「教育というのは希望を作り、可能性を作り出します。シヨバン、アインシュタイン、オルブライト國務長官。彼らもかつては難民だったのです。ではUNHCRとしてはどんな教育支援をしているのだろうか、「ふるさとを追われて一時的に避難しているので、できることなら、本国のカリキュラムに沿った教育を



©UNHCR



©UNHCR/H.Caussidis



©UNHCR/H.Caux



©UNHCR

提供したいと考えます」。しかし、すぐに帰国できる見通しが立たない場合が現実には多い。その場合は受入国でも暮らしていけるように、まずは現地の言葉を教えるようにしているという。「ふるさと」の状態、受入国の考えを総合して適宜変更を加えながら、子供たちの将来にとって一番いいように決定していく」のだ。

しかし語学だけをとてもそれは複雑だ。例えばネパールのブータン難民の場合、難民となった人びとが家で使うのはネパール語。一方、ブータンではゾンカ語が公用語で、学校では基本はネパール語と英語で授業を行う。それから忘れてしまわないようにゾンカ語の授業と3カ国語を教える必要が出てくる。教える側、教わる側、両者にとってとても困難であることは言うまでもない。しかし、こうした学習環境の中からでも才能を伸ばし、世に羽ばたく逸材が必ずいることは歴史が証明している。

各国、地域によって、支援の段階を考慮することも重要なことだ。食料、医療、そして教育支援だ。祖国、そして避難国での文化的、宗教的背景を鑑み、バランスをとらなければならない

る。そうした人たちの熱意にこたえるべくUNHCRでは教育支援に力を入れている。また、第8代国連難民高等弁務官を務めた緒方貞子さんによりREIT（難民教育基金）が設立され、さらに上を目指す人への中・高等教育も支援している。日本国内では、日本UNHCR協会が、この難民教育基金のための募金窓口にもなっているのだ。

日本でも、関西学院大学、青山学院大学で難民出身の学生受け入れが始まり、2008年にはソマリア出身の難民が酪農学園大学（北海道）にて博士号を取得し、話題にもなった。とはいえ、まだまだその数は少なく、機会を与えてくれる大学を求めている状態だ。「難民出身のクラスメイトがいることでお互いに刺激になるものがあるのではないか」と赤野間氏も言うように、難民に対する理解を深め、この特集をきっかけに機会を提供してくれる大学が1つでも増えたらと、切に願う。

遠い存在ではない。
難民のために
難民と共に

UNHCRでは、難民映画祭（レフュジィ・フィルム・フェスティバル）という催しを2006年から行っている。ニュースとして読むと難しい難民



赤野間 征盛 / 早稲田大学商学部卒業後、カリフォルニア大学(UCLA)大学院へ留学。講談社インターナショナル編集長やアジア・プレス代表を務める。1987年には平山郁夫氏とともに出版代表としてダボス会議に出席。2000年日本 UNHCR 協会(国連難民高等弁務官事務所・国内委員会) 理事長に就任。日本国連協会理事、日本ユネスコ協会・東京 YMCA 評議員。米国ニューオーリンズ名誉市民。

© 日本ユニセフ協会



伝統的なショールの織り方を難民キャンプで学ぶ女性。将来に向けての自立支援も欠かせない取り組みだ

問題を、映画作品として鑑賞し、難民の現状を知ってもらうことが目的だ。動員数も年々増加し、今年も6月20日「世界難民の日」から開催予定だ。これまでの映画祭、印象に残ったエピソードを何うと、「映画の後に監督や、難民問題に知識のある人をお招きして、質疑応答の時間を設けるのですが、皆さんなかなか帰ってくれないのです。映画の上映時間と同じくらいの時間をかけて熱心に質問をしてくださる姿が印象的でした」と目を細める。日本に在ると、残念ながら、難民問題は、遠いところで起こっている自分とは関係のないこと、という印象を受けてしまう。このことを赤野間さんに伝えると、「多くの国では、それは先進国を含めてですが、家族や身近な友人に難民出身の人がいることも珍しくなく、自分自身の問題でもあるのです。世界中でも身近なこととして実感するのが難しいのは日本くらいなものです」。百問は一見に如かず、現状を伝えるために映画はとても効果的なツールになっているようだ。

日本において、難民をはじめとする支援に対する考え方が一般化していないのは、島国という土地柄もあるのだろうか、と考えているとき、赤野間さんが尊敬する友人の話をしてくれた。 「フランスの出版社に勤める友人で、難民を引き取り、成長したらアメリカに留学させる。数年立つと、自分たちの送り出した子供たちに会うためキャンプングカーで回っている夫婦がいるのです」。 こんな生活を「常識的」と感じられる人が増えたなら世界は変わるかもしれない。 最後に、曖昧な使われ方がされることも多い、チャリティーについての考えを聞いてみたところ、 「自己満足と、人のため」ときっぱり。 難民支援の中核を担う方の言葉としては、少々意外な気がしたと同時に、正直、安心もした。何か支援活動にのり出すときに起こる、「いいことをした気持ち」に罪悪感のようなものを覚える人も多いのではないだろうか。しかし、赤野間さ

© 2006 SHINE GLOBAL, INC. ALL RIGHTS RESERVED.



今年も6月20日の「世界難民の日」から27日まで、「難民映画祭」が開催される。写真上は、上映予定作品の「WAR DANCE」(今秋公開予定、配給 IMAGICA TV)

THE NEW STANDARD OF
"NOBLESSE
OBLIGE"

日本 UNHCR 協会
〒150-0001
東京都渋谷区神宮前5-53-70
国連大学ビル6階
TEL 03-3499-2450
http://www.japanforunher.org/
E-mail: info@japanforunher.org
日本 UNHCR 協会では民間からの支援を必要とし、様々な方法での寄付を受けている

んは今回そんな気持ちも肯定してくれたのだ。確かにチャリティーという言葉の解釈は複雑で、使い方によっては誤解を与えることもある。しかしこの回答は、「私たちにできる一歩」への敷居を下げてくれたように感じた。